

# 東北地方の酪農と飼料栽培

## 三 浦 梧 樓

農業の近代化への踏台を酪農に求めた東北地方はかつての穀倉主体の単作時代に比べて著しく明るさを増し、活気に溢れてきたように見受けられるのは私一人の感じでしようか、兎に角最近の東北の酪農化のテンポはまことに急なものがあり第一図に示したように各地に高度集約酪農地域の指定をみ、特に岩手県のごときは全県高集酪という全国にもその例をみない形となつております。

現在の東北の乳牛頭数は一〇万頭と推定され、ここ一〇年間で五倍に急増し、北海道、関東地方に比肩する酪農王国となりつあります。そして現在の勢いで進展するにおいては日本最大の酪農地となる日も遠くないよう気がします。

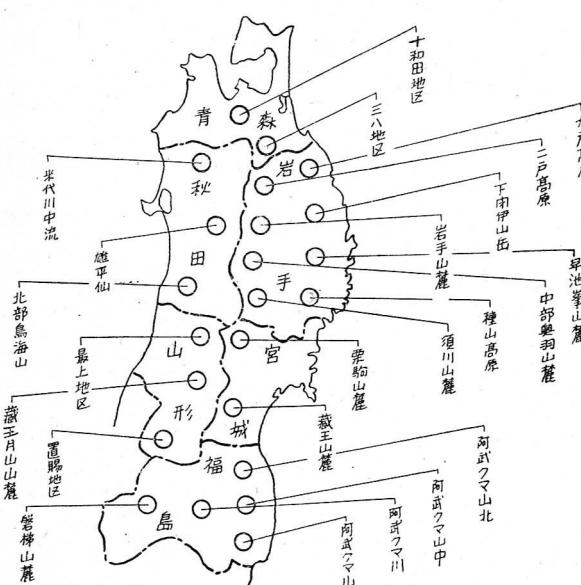
なぜ東北がかくも急に酪農化されて来たか、かつての馬産が駄目になり、それが乳牛に代つた。また農業の近代化には酪農が有利だということもありました。それにも増して東北の立地条件が酪農に有利であることでしよう。すなわち、

◎飼料生産の面では

関東以南のような夏枯れの心配もほとんどなく、北海道に比して牧草の生育利用期間が長く、田畠の裏作も全域で可能といふ飼料生産の理想郷です。

第1図 東北地方の高度集約酪農指定地域図

合計 23 地域



◎牛乳消流の面では東北の南部（福島、宮城県等）は年中市乳地帯に包含され、更に中、北部も夏季間は東京市乳圏内に包含され有利な地帶です。

しかしこの急速な進展を示している東北の酪農の現況をみると、それが理想的な形で進行しているかどうかを検討してみますと、そこには幾つかの弱さや欠陥も決し

### 一 東北の酪農は副業から企業に脱皮したい

—適正頭数を揃え飼料生産を高めること—

東北の酪農はまだ副業的な地位から脱しないものが随分多い、従来の水田作り、あるいは畑づくりに一

#### (一) 酪農企業化の第一は適正頭数の確保

—成牛二頭以上をもつこと—

多くの経済調査結果によれば府県での牛の適正頭数は二頭以上といわれております。これは主として牛乳の生産費の関係から割出された頭数であります。

更に酪農に期待する面は牛乳生産の他に土地生産力の向上もありますが、土地生産力向上の面からみた適正頭数は表裏二作によつて減耗される一〇%の地力の維持増進には年々堆肥で五〇〇貫の施用が必要でありますから、乳牛の堆肥生産量からみて五〇～六〇kg（五～六反）で一頭を持たなければ堆肥による地力増進は期待出来ません。東北の平均耕地面積からみても地力維持増進のためには二頭が必要です。

てないわけではありません。私は最近二、三年來たびたび東北の酪農に接する機会に恵まれ、酪農の歴史の古い北海道で育ち、人として東北の酪農を見るとき幾つかの点に気付くのですが、以下主として飼料栽培の面について心がけていたいだいたならばと思ひます。

人として東北の酪農を見るとき幾つかの点に気付くのですが、以下主として飼料栽培の面について心がけていたいだいたならばと思うことを記し、些かたりとも参考になればと思います。

つまり乳牛を導入すればなんとかなると思ひます。ただ単に日々の生産物である牛乳生産費がには必ず借金をしている農家は例外なくこのような飼い方をしているようです。

たゞ単に日々の生産物である牛乳生産費が高くなるばかりでなく、乳牛の健康も害され償却費を著しく高めている。乳牛の更新には必ず借金をしている農家は例外なくこのような飼い方をしているようです。

度合いが高ま

飼料生産の面では

生産にも力が入らず、勢い購入

飼料生産の面では

生産にも力が入らず、勢い購入

り、乳代の四～五割は購入飼料となつてゐる例も決して少くない。このような事態はたゞ単に日々の生産物である牛乳生産費が高くなるばかりでなく、乳牛の健康も害され償却費を著しく高めている。乳牛の更新には必ず借金をしている農家は例外なくこのような飼い方をしているようです。

たゞ単に日々の生産物である牛乳生産費が高くなるばかりでなく、乳牛の健康も害され償却費を著しく高めている。乳牛の更新には必ず借金をしている農家は例外なくこのような飼い方をしているようです。

産費の面からも土地生産上の面からも、成生、二頭以上が必要ということになります。幸いにして現在平均一・六頭程度になつておりますから今一ふんばかりです。

## (二) 酪農企業化の第二は飼料生産を高める

こと

「東北では一〇アール当たり二、〇〇〇飼料」

単位を目標に

日々の生産物である牛乳の生産費をみますと、飼料費が五〇%以上となつておられます。牛乳で利潤を擧げることを第一に考えなければならぬ酪農では、いかにして安い飼料で生産を擧げるかが大切な問題ですが、割安な飼料、それは良質な粗飼料の自給が最も有利です。また良質な粗飼料(草や飼料作物)はただ牛乳の生産費低下だけでなしに、放牧利用せば飼育労働費の節減となり、乳牛の健康が維持され、償却費の軽減にも役立つ等、酪農で利潤を追求し、すなわち酪農の企業化のためには、飼料の栽培生産が極めて重大な問題であることはいま更述べるまでもないと思ひます。但し飼料作物や牧草の栽培もただ単に作ればよいということでなしに東北地方では一〇%が當り(反当)飼料単位で二、〇〇〇、青草重で一五、〇〇〇匁程度を目指とした高い生産を行わなければ決して企業的な酪農は行われません。二、〇〇〇飼料単位の生産を行いますと、多少のロスを見込んで、この飼料だけで約二〇石近くの牛乳を生産することができます。そこで東北の飼料栽培で二、〇〇〇飼料単位の生産は可能かどうかを検討してみましよう。

第2図 東北地方で10アール当たり2,000飼料単位の生産は無理か

	五月	七月	九月	十一月	一月	飼料単位	可消化純蛋白
						12,000kg	1,800
						ラデノ放牧地	302kg
						燕麦アンペッチ	2,142
						イタリアン	234
						かぶ	1,720
						根部葉	122
						裏作ライ麦ベッチ	
						玉蜀黍	
						8,000	
						4,000	
						5,000	

三・二%の牛乳を一日二〇匁(一斗一升)を生産する乳牛の一日に必要な、維持飼料と生産飼料合計して、約一〇飼料単位と、三〇〇瓦の可消化純蛋白ですから、一八〇日の飼料単位と蛋白は一八〇日で余剰が出来ます。従つて乳量にして一九石ぐらゐの生産となります。

更に畠地の夏、秋二作の青刈えん麦とイタリアンライの二番利用、かぶの栽培、裏作ライ麦と玉蜀黍の冬、夏二作の例をみても今一息の頑張りで一〇アール当たり二、〇〇〇飼料単位の生産は決して無理ではありません。

以上大雑把ではあります、急速な進展をみせている東北の酪農が堅実に発展するため特に考慮すべき適正頭数と更に利潤追求のためには絶対必要な安価な飼料生産すなわち高い収穫のあがる飼料栽培の必要を述べました。勿論この飼料生産の面で高度集約放牧の造成も必要ではありますが、これは国あるいは県の助成指導で適切に行われておりますので、今回は東北の酪農家個々が主として行つてゐる飼料栽培や今後取り上げるべき問題について、農村の現況と考証併せて以下述べたいと思います。またその目標は二、〇〇〇飼料単位に近づく

(一) 東北の裏作推進のための三色化運動  
東北地方も、水田裏作による飼料生産の欲求が大であるに拘らずあまり普及していないのはなぜか、いま裏作障害の理由別を統計の示すところで見ますと、

慣習によるもの  
積雪寒冷によるもの  
低位生産地等によるもの  
用排水不良等によるもの  
前後作等によるもの  
労力不足等によるもの  
その他によるもの  
四一・六四%

六・九九  
五・八五  
五・〇五  
四・六八  
二六・五五  
一〇・二四

となつており、想うにこれは裏作物を狭い範囲に限定しているところに起因する。

飼料の裏作においても紫雲英に限定しますと、積雪寒冷の東北では不安定で裏作はアーテにはならないということからそれが習慣的に裏作障害となり、また湿地に不適、播種適期が短く労力や、前後作等を非常に阻害しています。

裏作を推進するためには稻作自体の作付を移動(早植、晚植等)することも考慮すべきですが、もつと裏作物に彈力性をもたせ、安定収穫と、各種条件に合致する作物なり作付が必要です。このためには一、

第二図でみますとラデノ放牧地で現在二、〇〇〇匁(三、〇〇〇貫)程度の収穫はザラにあげており、適切な肥培管理や、放牧管理、混播を行いますと更に一・二割の増収は他作物に比して遙かに容易であります。従つて二、〇〇〇飼料単位は決して無理ではなく、いま普通に行われているラデノクロバーの一、二、〇〇〇匁(三、〇〇〇貫)の栄養価を計算しますと(四分の一は禾本科)一、八〇〇飼料単位、蛋白三〇二匁となり、これでどのくらいの牛乳生産が出来るかをみますと、体重五〇〇匁で脂肪率

## 二 水田裏作飼料栽培の積極化

—水田裏作三色化運動の提唱—

東北地方は岩手県を除いて農用地の四五七〇%が水田で放牧採草地、畠地が少く、

その上最近水田地帯での乳牛増加が顕著なものがあり、水田酪農地帯の様相が濃くなつて来ています。従つて飼料生産も水田と生産飼料合計して、約一〇飼料単位と、一日の飼料単位と蛋白は一八〇日で余剰が出来ます。従つて乳量にして一九石ぐらゐの生産となります。

更に依存する度合いが高まり、特に裏作を利用する飼料生産が一層関心を呼んでおりますが、その普及はまだまだです。そこで裏作面積を拡げ、しかも質と量の向上を期待して三色化運動を提唱したい。

